國學院大學学術情報リポジトリ

九州板碑考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Harada, Shoichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002417

（論文要旨）

九 州 板 碑 考

原 田 昭 一

石塔に関して、九州には質量とも全国を代表する資料が存在する。なかでも、国東塔に代表される大分県国東半島地域や、臼杵石仏に代表される大分県臼杵・大野川流域、城泉寺層塔群をはじめとした熊本県球磨川上流地域、「黄金塔」と呼ばれる南九州最大の石塔をもつ宮崎県えびの市・湧水町をはじめとした川内川上流域など、局地的に卓越した石造文化財地域がみられるが、これらの地域以外にも他地域と比較して決して劣ることのない石造物の数々が認められる。その背景には、中世、各地域に独特な仏教世界が展開していたことがある。板碑に関して、最も資料数が多いとされる豊後に例をとれば、総数2千基をこえる板碑が存在すると指摘されているが、この総数は全国的にみて埼玉・東京・宮城・群馬につぐ数値であり、その隆盛振りがうかがえよう。

板碑は一観面の石に本尊としての梵字種子あるいは図像をあらわし、その下に造立年月日・願文・偈文などの銘文を記し、本尊は、時として名号・題目をはじめとしたその他の対象物を表すものである。その形態については、頭部を山型に造り、額部に二条線をもち、しばしば額部や基部の両者か、あるいは額部のみを突出させる特徴をもつ整形板碑と、自然石を利用した自然石板碑の2形態が存在する。そして、出現以来、時代の変遷とともに、内容・形態とも変化を遂げ、本尊をもたないものや、形態についても、本来、整形板碑の特徴であった頭部を山型に造り、額部に二条線をもち、額部や基部を突出させる形態の退化形態だけでなく、様々な形態が付加され、混沌としてくる。

本稿では九州における紀年銘をもつ整形板碑の実測図作成をもとにした資料化を前提とし、管見に触れる限り、筑前5例・筑後1例・肥前6例・豊前24例・豊後118例・肥後8例・日向57例・薩摩11例・大隅18例の板碑を紹介した。この資料数により九州各地における板碑の分布傾向がつかめる。資料数が10例に満たない筑前・筑後・肥前・肥後では、整形板碑が乏しい傾向があり、反対に、豊前・豊後・日向・薩摩・大隅では整形板碑が隆盛をきわめたことがうかがえ、中でも118例を数える豊後が際立っている。この分布傾向は紀年銘をもたない資料に照らし合わせても同様な傾向を示すものと思える。この隆盛地の違いには、石材の存在が大きく起因しているものと考えられる。豊前・豊後・日向では良質な安山岩が、また、豊後・日向・薩摩・大隅では良質な凝灰岩が、それぞれ産出され、工人系譜のもと板碑製作が根付いていることがうかがえる。これに対し、筑前・筑後・肥前には凝灰岩・安山岩のような良質な石材が乏しく、また、肥後においては凝灰岩が豊富であるものの、自然石板碑の隆盛が整形板碑の流行の妨げになっている印象を受ける。

整形板碑のはじまりについては、紀年銘をもつ最古の資料として、正嘉2年（1258）銘をもつ熊本県宇城市塔本家板碑があるが、弘安期（1278～1287）・正応期（1288～1292）に九州各地においてはじまりのピークを迎えることが確認できる。それは、地域や板碑の石材などを問わず、共通する。板碑に限らず、五輪塔をはじめとしたさまざまな石塔において、この時期に画期を迎え、また、工人系譜が先進的な各地に根付いていく時期である。しかも、そのはじまりはきわめて完成された様相をもち、鎌倉後期から南北朝期にひとつの隆盛期を迎える。

九州における板碑の出現期は全国的にみても、関東地方の武蔵型板碑に遅れるが、比較的、古式の板碑が確認できる南東北地方の動向に近い。この南東北地方の板碑も安山岩や凝灰岩を石材としており、初期の板碑の型式的な特徴をみてもきわめて似ている。

整形板碑の型式を検討すると、ほとんどの属性において、板碑極少期である15世紀前半に大きな画期が存在する。13世紀の整形板碑出現以来、鎌倉期末～南北朝期を通じ、安山岩・凝灰岩を石材とする板碑すべてにおいて、定型化した型式をほとんど逸脱することなく製作され続けており、山型を三角形に上部に突出させ、山型下

に断面三角形の二条切込みが近接して刻まれ、二条切込み下には突出した額部をもち、その下には梵字種子や像様等で仏菩薩をあらわし、それとともに銘文等を刻んだり墨書したりした碑身がある特徴をもつ。

それでは、この画期とはどのような様相をもつものであろうか。銘文からの願意をみると、鎌倉～南北朝期には死者の冥福を祈るため仏事を行う追善供養の板碑が多く確認できる。豊後地域における最古の紀年銘資料に位置付けられている大分県国東市護聖寺1号板碑（1291年銘）や日向における最古の紀年銘資料に位置付けられている宮崎県日南市折生田板碑（1293年銘）においても、銘文中には、親の霊を祀る子の意味をもつ「孝子」とあり、これについても追善供養の願意をもつものと解釈できる。この時期の板碑の中には、35日忌・100日忌・1周忌・3回忌・7回忌・13回忌・17回忌・23回忌・27回忌・33回忌等の忌日・年忌が確認できるものもみられる。これらの忌日・年忌のうち、13回忌が9例、1周忌が5例、3回忌が4例、100日忌が3例というように、忌日・年忌の重要性とともに石塔造立の契機とする意識が資料数に反映されているかのようにみえる。

これに対し、板碑極少期である15世紀前半の画期をはさみ、1470年代以降にほとんどの属性において変化が生じ、形態が多様化および小型化するともに資料数が激増することが確認できる。山型は三角形の頂部が前方に移行し、中には三角形が失われ、方形をはじめとしたその他の形態も出現する。また、山型直下の二条切込みは細くなり２条の陰刻線状に変化する傾向とともに間隔をあけて刻まれるようになり、この二条線が失われる資料すら出現する。額部の突出は低くなり、額部の突出すら表現されていない板碑もみられ、碑身部にみられる梵字種子も薬研彫りから小さく線刻状になる傾向があり、はては梵字種子すら刻まれなくなり、梵字種子にかわり円相や卍をはじめ多様な様相をもちはじめる。もちろん鎌倉・南北朝期に流行する型式をもつものもそのまま存在するが、かなり様相が異なり、復古調を意識したものかのようにも受け取れるものへと変化している。

この時期には、板碑碑身部の中に地蔵像や位牌形が確認できるようになり、当時の冥界信仰の流行が読み取れるとともに、銘文に戒名や没年月日が刻まれていることから、板碑が墓碑的機能をもつようになったことがわかる。地蔵像を刻むことは近世墓碑まで受け継がれていくが、板碑造立の画期に伴い成立し流行する新たな要素の一つであり、墓碑的機能の出現はまさに近世墓碑の下地となるものであった。

九州地方において、石塔に地蔵菩薩が刻まれる類例は石幢の導入に始まるが、応永17年(1410)銘をもつ大分県豊後大野市朝地町館石幢以来、豊後南部が先行しながら、九州各地において流行し、近世に至っても一部の地域においては継続して製作され続けている。これらの石幢の龕部には六地蔵や十王の内の2体を彫るものが多いが、地蔵は冥府の十王中、閻魔王の本地仏であり、生前、善行を積んだ衆生を救済し極楽浄土へ導く菩薩とされており、幢身に刻まれた銘文の願意もあわせて、冥界信仰が造立背景にあることがうかがえる。一方、地蔵を碑面に刻む板碑は、永正2年(1505)銘の大分県臼杵市名塚薬師堂板碑以来、戦国期を通してわずかながらみられる。これらについても、当時の冥界信仰の流行が板碑にも取り入れられたものと捉えるべきであろう。六地蔵・十王の石造物は、石幢や板碑に限るものでなく、石殿や丸彫りの石仏にもみられる。なかでも石仏は永和4年（1378）・5年（1379）銘をもつ大分県国東市文殊仙寺石造十王像や明徳4年（1393）の紀年銘をもつ石造地蔵を含む石造十王からなる大分県国東市重藤十王堂石造仏像群など14世紀後葉にはじまり、大分県国東半島一帯に広く流行し、近世まで受け継がれている。このように、当時の信仰形態が広く石造物に取り入れられ、その一端が板碑にもあらわれていることがわかる。

一方、墓碑的機能をもつ板碑を考えれば、近世に受け継がれる墓碑では、民俗例から7回忌や13回忌などの年忌を契機として造立される場合が多く、その前身となる1470年代以降の板碑についても、同様であることが推測できる。しかし、近世の墓碑と同様に1470年代以降の墓碑的機能をもつ板碑では、刻銘に忌日が記されているものは、「為道覚卅五日追善」と刻まれている宮崎県定善寺慶長8年銘板碑以外には確認できない。前述したように、1390年代以前の板碑に追善供養を行った年忌の刻銘がみられることは興味深いが、1470年代以降の板碑が墓碑化し、その造立が基本的に年忌を契機としたものであるなら、造立の行為自体が追善の意味をもつものであり、あえて、銘文中に表現する必要がなかったものと考えられる。

また、これとは別に、板碑激減期以前にあたる南北朝期後葉に流行する結衆の石造物は、銘文中に造立者の人名を書き連ねた交名をもつ特徴がみられ、併せて現代も村のお堂など地域の信仰の対象となっている空間に造立されている特徴がある。これらの石造物は南北朝期後葉に始まった集村化に伴い、村人の紐帯を強める目的のもとに共同で製作されたものと考えられ、室町期から戦国期に至り、宝篋印塔・宝塔から石幢（六地蔵塔）にその主役の座を譲り、板碑自体が結衆の塔婆とされるのは比較的少ない。これに加えて、庚申信仰に伴う造立例が 16 世紀後半代以降に出現する。

九州における整形板碑にみられる結衆塔婆は、元亨元年（1324）銘をもつ大分県国東市岩尾板碑にはじまり、板碑・宝塔・宝篋印塔・五輪塔等、様々な塔形のもと、14 世紀中葉をピークに南北朝期に盛行する特徴をもつ。このような結衆塔婆は当初の歴史環境をとどめる類例をみると、小庵小堂や村落共同墓地に総供養塔として建てられている場合が非常に多いことがわかる。その背景には集村化に伴う社会変化が根底にあることがうかがえ、14 世紀後半に兆しをみせはじめ、戦国期以降ピークに達し、戦国期に原型がつくりあげられた集落形態は近世集落へと受け継がれていく。この動きは、墓制とも連動し、遺構として集団墓が各地でみられるようになる。

板碑にみられる銘文のなかにはこのような社会的変化が反映されているものが存在する。整形板碑にみられる結衆塔婆は、大分県国東市岩尾板碑から、応安 6 年（1373）銘をもつ「一結衆」と刻まれた大分県由布市畑田板碑まで、交名を記さない銘文をもつものが確認できる。正慶元年（1332）銘をもつ大分県宇佐市佐田社 1 号板碑には「時衆八十人各敬白」、建武元年（1334）銘をもつ大分県豊後高田市其ノ田 1 号板碑には「地蔵堂講衆」、康永 4 年（1345）銘をもつ大分県杵築市普門坊跡板碑には「別時講衆敬白」、応安 6 年（1373）銘をもつ大分県宇佐市庄部観音堂 1 号板碑には「一結衆敬白」とそれぞれ刻まれており、この傾向は南北朝期中葉に流行する宝篋印塔や、宝篋印塔の流行に押されて衰退していく宝塔においても同様のことが確認できる。

しかし、板碑空白期を挟んで以降の板碑について、銘文からみて結衆塔婆は、大きく様変わりしてしまう。応安 6 年（1373）以降に姿を消す結衆塔婆は、明応 2 年（1493）銘をもつ大分県豊後大野市五郎丸板碑においてふたたび登場する。当該資料には 32 名の交名が確認でき、以後、「結衆」・「一結衆」・「講衆」・「時衆」のみの表現はほとんどみられない。唯一、天正 19 年（1591）銘をもつ宮崎県高原町合窪橋板碑に「結衆百人」とみられるのみで、基本的に結衆塔婆の場合、交名を刻む板碑に変化している。中には、天文 10 年（1541）銘をもつ大分県豊後大野市百枝板碑に「□講衆」の銘文と 10 名の交名が、また、天文 17 年（1548）銘をもつ宮崎県えびの市彦山寺跡 3 号板碑に「結衆」の銘文と 35 名の交名が刻まれているものが確認できるが、この両者にも交名が刻まれている。

他の塔形の結衆塔婆に目をやると、豊後に流行する石大工「玄正」の手による宝篋印塔には、正平 18 年（1363）銘をもつ豊後大野市福正寺宝篋印塔以来、交名が記される結衆塔婆が流行し、その始まりは板碑に先行する。これは結衆の塔婆を石塔に求める場合、当時、もっとも流行の先端にあった宝篋印塔を選択したことに起因するものであろう。このような結衆の塔婆としての宝篋印塔は、村のお堂としての小堂の前にひときわ大きく存在感を示すものとして造立されており、集村化に伴い村人が集う信仰の場である小堂前において、村人の紐帯を強める目的のもとに製作されたことが顕著に表れている。このような結衆の塔婆は室町期から戦国期に至り、宝篋印塔から石幢（六地蔵塔）にその主役の座を譲り、小庵・小堂前や墓地、さらには何らかの結界の地に造立されている。ひときわ大きく存在感を示す必要があるためか、結衆の塔婆として板碑の数は少ない。しかし、その変化が板碑激減期を経て確認できることは、板碑の型式変化と造立趣旨の変化が全く無関係であったとはいえないもののように思える。

また、九州の板碑は整形板碑だけでなく、自然石板碑も数多くみられる特徴がある。一概に自然石板碑と言っても、角の取れた転石を利用しているものもあれば、節理面をもつ角礫を利用したもの、粗割りをした敲打面を利用したものもみられる。加えて、敲打によりわずかに加工を加えたものもあり、その様相は様々である。共通するのは、形を整えていないことである。このような自然石に、仏菩薩を梵字種子や陽刻・線刻等で表し、ま

た、銘文を刻んでいるのは、整形板碑と共通する。梵字種子や陽刻・線刻等で表した仏菩薩や、刻銘の内容も整形板碑と何ら変わるものでなく、違いは整形されているかいないかにすぎない。

九州における自然石板碑の石材は多様であり、玄武岩・凝灰岩・砂岩・花崗岩・花崗閃緑岩・安山岩などをはじめとして様々な石材が確認されている。これらは、いずれも近隣地に産出する石材であり、凝灰岩・安山岩等、九州における良質な石塔部材となる石材が産出しない地域においては、それぞれの地域における石材を採取し、整形がなされない自然石板碑を生み出す特徴がある。それは、筑前・筑後・肥前・肥後など九州北西部地域に多くみられ、これらの地域は基本的に九州中南部の凝灰岩・安山岩を石材とする板碑とは型式的に異なる特徴がある。

本稿で集成を試みた自然石板碑の資料数は、筑前・筑後が 96 例、肥前が 69 例、肥後が 354 例、豊前が 25 例、豊後が 9 例、日向が 20 例、薩摩・大隅が 5 例といったように筑前・筑後・肥前・肥後に圧倒的に多いことがわかる。これらの地域には、整形板碑が少なく、自然石板碑と整形板碑が補完しあい分布する関係であることがうかがえ、整形板碑が隆盛する地域に自然石板碑が少なく、反対に自然石板碑が隆盛する地域には整形板碑が少ないことがわかる。各時代の造立数についても、ほぼ、整形板碑と似た傾向を示す。ただ大きく異なるのは、整形板碑が鎌倉期中葉～後葉にはじまることに対し、自然石板碑は平安時代後期には出現していることである。

自然石板碑の造立に関しては、九州における他の塔形に比較してもきわめて古い段階から発生し、元永 2 年（1119）銘をもつ福岡県宗像市玄海町鎮国寺自然石板碑を嚆矢とし、筑前・肥前・肥後などの自然石板碑隆盛地においては平安後期から出現していることがわかる。

以後、小数ながら造立され続け、整形板碑が流行しはじめる鎌倉期後葉に至り、自然石板碑も数を増やす傾向がある。このことから整形板碑出現以前から、仏菩薩を安置し、刻銘を施した石の塔婆の存在が求められたことが自然石板碑を通じて理解できる。また、その終焉についても整形板碑のように形態に現れにくい特徴をもつため、寛文期以降でも庚申塔などの民間信仰碑や墓碑等でごく普通にみられる。しかし近世の自然石板碑は墓碑として造立される場合、特に豊前から豊後にかけての山稜部をはじめ、修験の地や、在家信徒の墓地においても行者の墓と判断できるものに多い傾向があり、近世墓碑の中でも特殊な位置づけがなされていることは興味深い。

なお、近年の板碑研究において石製の板碑と木製の塔婆との関連性が指摘されているが、頭部を山型に造り、額部に二条切込みをもつ典型的な板碑の特徴をもつ最も古い木製品が石川県野々江本江寺遺跡から出土したように、11 世紀後半以降の木製塔婆の中には明らかに板碑形をしているものがあり、今後、板碑との系譜関係が類推できる木製品の発掘調査例の増加が期待されよう。豊後に例をとれば、軟質の凝灰岩を石材として石造物を製作することは平安時代後期にはじまり、石塔開始のピークである弘安期に石塔とは異なる木製あるいは金属製の塔婆をモデルにしたと考えられる石塔が複数基存在し、石塔のみで解釈できない要素もある。九州の石塔が比較的彫成しやすい軟質な凝灰岩や安山岩を石材としていることからも、木製の塔婆からの移行はスムーズに行われたであろうことが推測できる。板碑についても、自然石板碑が平安時代後期に始まり、その時期に整形板碑がみられないのも、この時期には木製板碑が存在していたからにほかならないと考えたい。極めて少数ながら遺物として木製板碑が存在するのもその証拠になるものであろう。

一方、板碑の終焉については、中世側からの視点では捉えにくい。板碑に限らず、中世石塔は戦国期から 17 世紀前半の慶長・元和・寛永期などに至っても何ら減少することはなく、形態も戦国期からの型式変化を受け継ぐ。中でも、板碑よりもはるかに数が多い五輪塔が爆発的に流行する現象は全国的に確認できるが、九州では、寛文期を契機として、五輪塔・宝篋印塔・宝塔等、板碑以外の墓塔の機能をもつ石塔群は一斉に消えてしまう。整形板碑が生き残ったにしても、寛文期以降の板碑型墓碑とは型式的に異なるものがほとんどである。板碑だけではなく、五輪塔・宝篋印塔・宝塔等さまざまな塔形が板碑型墓碑に集約されてしまったのである。加えて、中世の板碑とは比較にならないほどに板碑型墓碑は資料が多い。それとともに近世的な墓地景観に変化し、このような変化の背景には、当時、幕藩体制下で強力に推し進められた寺壇制度が強く影響したことが考えられる。これにより、中世的な石塔が否定され、整形板碑もその渦中に飲み込まれてしまったものと考えたい。近世の寺壇

制度が宗教史・政治史の画期であるなら、中世の整形板碑はそれにより駆逐されてしまった一属性であるといえよう。

九州の板碑研究は、板碑の資料化及び集成に偏り、各論に踏み込んだ議論がほとんどなされていないのが実情である。しかし、学問の基礎として資料化及び集成の作業はすべての前提となるものであり、本稿においてもこの視点を最優先し、取り組んだ。今回、集成した資料に対し、様々な角度から考察を加えたが、まだまだ十分に資料化されているとはいいがたい。さらに踏み込んだ議論を深めるためにも、紀年銘資料だけでなく、より多くの資料化に取り組むべきであろうし、それを踏まえて、さらに細かく各論に対して議論を深めていく必要があろう。本稿がその敲き台となることを願ってやまない。